

平成29年度第7回きのくにコミュニティスクールの推進に係る研修会（紀北会場）

- 1 日時・会場 平成30年1月30日（火） 13:30～16:30 かつらぎ総合文化会館
- 2 参加者 市町村教育委員会きのくにコミュニティスクール担当者
教育関係者 県立学校関係教職員 共育コーディネーター 等
合計 104名
- 3 内容

◆実践発表①「那賀中学校におけるきのくにコミュニティスクールの取組」

紀の川市立 那賀中学校 校長 高岸 隆行 氏

○学校運営協議会

①主な活動内容

- ・学校運営の基本方針承認
- ・生徒会との懇談
- ・きのくにコミュニティスクールアクションプランの作成



○成果

- ・学校に多様な人々が関わっていくことで、専門性や地域の力を生かした教育活動等が実施され、学校での学びがより豊かに広がりのあるものとなり、子供の学びが充実した。
- ・学校運営や教育活動等への参画を通じ、子供たちと触れ合い、これまで学び培ってきたことを生かす機会を得られることで、自己有用感や生きがいにつながった。

◆実践発表②

「共育コーディネーターから見えるきのくにコミュニティスクールの可能性」

橋本市共育コーディネーター 土田 淳子 氏

○思いを広げる「共育ミニ集会」と「公民館報」

○各小・中学校に学校運営協議会ができて

①隅田中学校区共育コミュニティ本部と学校運営協議会の関係

- ・共育コミュニティの理念のもと地域の支えを土台にして学校運営協議会が機能

②共育コーディネーターとして

- ・校長先生・公民館長との距離が近い
- ・中学校区単位・小学校区単位で考える

◆グループ協議 「きのくにコミュニティスクールの推進に向けて」

○地域での主な活動例について

- ・園・小・中と地域住民による一斉清掃活動
- ・地域防災活動 等



○地域でのコミュニティ組織の作り方について

- ・ボランティア活動をしている知人の誘い。
- ・広報で共有コミュニティの活動を知り参加した。

◆パネルディスカッション

「地域に根ざしたきのくにコミュニティスクールの推進に向けて」

コーディネーター：	文部科学省CSマイスター	大谷裕美子	氏
パネリスト：	橋本市立城山小学校	校長 山田卓司	氏
	和歌山県立笠田高等学校	校長 森下兼男	氏
	かつらぎ町立渋田小学校学校運営協議会	会長 坊 暁光	氏
	橋本市共有コーディネーター	土田淳子	氏
	紀の川市立那賀中学校PTA	会長 山本順計	氏

○学校と地域・家庭がつながる「しかけ」について 心がけること

- ・山田：
 - ・地域の特性をつかむ。
 - ・学校と地域がwin-winの関係になるよう配慮する。
- ・森下：
 - ・地域の方に学校のことを知っていただく。
 - ・急がずにコミュニティ・スクールを保護者・地域に浸透させる。
- ・坊：
 - ・子供と地域が一緒になってできることを考える。
 - ・広報の充実。「コミスクだより」全戸配布
- ・土田：
 - ・地域の方が学校に入るの、いつだれが来るのか「見える化」を進める。
 - ・教職員の理解が必要。
- ・山本：
 - ・人々の得意な分野を活用。
 - ・地域に発信することが大切。



○今年度の取組を通じて、①学校や地域の変容について②今後の在り方について

- ・山田：①学校の支援者が増え、地域と子供、教師と地域の距離感が近くなった。
②今後は支援だけでなく、指導の部分でも活用できることを考えていきたい。
- ・森下：①小・中学校の授業交流を通じて、それぞれの指導方法や児童生徒の様子から本校の教員も刺激を受けた。
②学校から地域への要望も出し、双方向で活動していくことで、可能な限り地域に還元できる活動を進めていきたい。
- ・坊：①挨拶だけでなく、話しかけてくれる子供が増えている。
②地域の方の役に立つことに喜びを感じ、地域発展のために貢献できる人に育ってほしい。
- ・土田：①地域で出会った子供から声をかけられるようになった。
②実態を把握し、ねらいを共有することが重要。
- ・山本：①中学校の生徒がアットホームな関係を築いている。
②「自分たちの街の子供」という観点が子供たちを包み、成長を促す。

○質問

①（地域の方に）地域自体の結びつきが不足している。どのように関わればよいか

- ・土田：新興住宅地では学校側からの発信で地域に広める。
- ・山本：子供を軸に据えて、組織をつくっていく第一歩が必要。

②（校長先生に）ボランティアの人数確保や募集はどのようにしているか

- ・山田：既に学校へ様々な団体が入っているので、校長から事業の依頼をすることで、団体の方がその事業に応じたボランティアを集めてくれている。
- ・森下：今はボランティアを募っておらず、既存のボランティアを活用。

◆助言 美加の台学園の取組と今後のきのくにコミュニティスクールの推進に向けて

文部科学省 CSマイスター

大阪府 美加の台中学校区 ゆめ☆まなびネット

学校支援コーディネーター・学校運営協議会 副会長 大谷 裕美子 氏

○美加の台学園の運営委員について

○コミュニティ・スクールについて

- ・学校・家庭・地域の思いや情報、行動を共有

○コーディネーターの役割

- ・地域のボランティアの要望と学校の思いを適切に伝え、調整する

○しかけ

- ・地域の方の出番づくり、フィールドづくり

○熟議

- ・子供の課題を把握し、今後取り組むことについて話し合う

○キーワード

- ・「不易と流行」「しかけ きっかけ 声かけ」「熟議」

○子供のために、学校や地域のために

- ・お互いに知り合い、当事者意識をもって参画する



4 参加者の声（アンケートより）

（共育コーディネーター）

- ・地域と学校がwin-winになる活動を展開することが重要だと感じた。人材の発掘、地域差、小中高の差など、一律に考えられない点も多く、これからの課題をはっきりさせる必要がある。

（学校運営協議会委員）

- ・那賀中学校の校長先生のお話をうかがって、改めて民生委員の連携・協力の必要性を感じさせられた。学校側がもっと地域の方々に協力を求めてもいいと思う。アクションを学校が起こさないと我々からは積極的に動きにくいと思う。

（PTA会員）

- ・地域コミュニティで地域の方、子供たち、学校、保護者がつながっていき、お互いに良い関係を作っていければ良いと感じた。ボランティアの人数確保や連携が課題と感じた。